

症例・診断

B会場(16:10～16:50)

座長 矢野 敬文(国立九州医療センター)

B22. 発熱と肺浸潤影が繰り返し認められた骨髓異形成症候群関連肺病変と考えられた1例

大分医科大学第2内科

三戸克彦,緒方正男,山上由理子,山形英司,
山崎 透,平松和史,大塚英一,永井寛之,
菊池 博,那須 勝

骨髓異形成症候群(MDS)の経過中に発熱と肺浸潤影が繰り返し認められたMDS関連肺病変と考えられた1例を経験したので報告する。症例は69歳女性でMDSの経過中に発熱と肺浸潤影を主訴に入院となった。入院7日目より発熱、咳嗽が出現し、白血球数の増加とCRPの上昇が認められた。胸部X線写真で、右中下肺野に浸潤影が出現したため抗菌薬の投与を行ったが改善なく、気管支鏡検査を施行した。気管支肺胞洗浄(BAL)液では総細胞数の増加と細胞分画ではリンパ球、好中球の増加が認められた。気管支肺生検では、気管支上皮下に壊死を伴った好中球の集簇を認め、好中球とリンパ球浸潤による肺胞壁の肥厚が認められた。BAL液、喀痰、血液、尿、骨髓の一般細菌、抗酸菌、真菌は陰性であった。MDSに関連した間質への好中球浸潤による肺病変と診断し、副腎皮質ステロイド薬投与による治療を行い、軽快した。

MDSに関連すると考えられる間質性肺炎で、病理組織学的検索が行われた報告は、我々が検索した範囲では7例しかなく、若干の文献的考察を含めて報告する。

B23. 大腿骨頸部骨折後に発症した脂肪塞栓症候群の一例

沖縄県立八重山病院

玉城 仁

長管骨骨折に伴う脂肪塞栓症候群(骨折後72時間以内の呼吸機能の悪化、血小板低下、精神症状の悪化)は、比較的稀でその患者の0.5～2.0%といわれる。今回、臨床経過、画像所見等より脂肪塞栓症候群と診断した症例を経験した。

症例は生来健康な82歳、女性。来院4,5日前より上気道炎を思わせる症状があった。来院当日、自宅にて転倒、左大腿骨頸部骨折をし当院整形外科入院となった。入院時は呼吸状態は安定していたが、骨折から40時間後より低酸素血症(リザーバースマスク O_2 9 l/min)、せん妄状態となり、血液検査上血小板減少を呈し、胸写ではびまん性スリガラス上陰影を認めた。鑑別診断としてウイルス性肺炎、急性間質性肺炎等も考えられたが、臨床経過、胸部CT所見等より脂肪塞栓症候群と診断し、ステロイド剤は投与せず経過観察したところ自然軽快していった。CT所見は脂肪塞栓症の補助診断に有用であった。

本疾患に関する文献的考察もあわせて報告する。

B24. 胸痛にて発症した原因不明の肋間動脈破裂の1症例

社会保険小倉記念病院内科

田浦裕輔、金子弘文、山崎 裕、加藤達治

症例は66歳の男性。陳旧性肺結核の既往あり。突然の激しい左胸部痛にて来院した。胸部X線写真上、左肺野全体の浸潤陰影を認めた。膿胸の疑いにて入院となった。胸部造影CTにて、左肺底部に径11×7×16cm大の半球状のfluid collectionが見られた。胸壁から造影剤の漏出が見られたことから、そのfluid collectionは肋間動脈の破裂による血腫であろうと考えた。動脈造影にて左第8肋間動脈の末梢に仮性動脈瘤を認め、この部位よりの出血と考えた。動脈瘤の近位側よりgelformを用いて塞栓し、さらにらせん型microcoilを用いてcoilingした。施行後の造影では、塞栓部位より末梢及び仮性動脈瘤は造影されず、治療は成功したと考えた。胸腔ドレーンを挿入し洗浄を行った。その内容物は凝血塊であり、菌の発育は認めず、細胞診では悪性の細胞は認められなかった。

外傷による肋間動脈破裂はよく経験されることだが、原因不明の肋間動脈破裂により血腫を形成する症例は報告がほとんどないため報告する。

B25. 当院で経験した喀血症例の検討

田川市立病院内科

中川喜代子、池田秀樹

同放射線科 田代誠

北九州市立八幡病院放射線科 武田宏之

国立療養所川棚病院呼吸器科 川上健司

長崎大学熱研内科 大石和徳、永武毅

対象 平成9年4月～12年4月の3年間に田川市立病院内科にて、喀血のため気管支鏡を施行し出血が確認された19例について検討した。

症例 男性12例、女性7例、年齢45歳～81歳、平均63.4歳

基礎疾患 気管支拡張症10例、肺結核後遺症9例、抗凝固療法中2例、胸腺癌1例、閉塞性動脈硬化症1例、なし2例

出血量 20ml/day以下7例、20～100ml/day 5例、100ml/day以上7例

出血原因 気管支拡張症9例、活動性肺結核3例、MAC症1例、肺癌・胸腺癌2例、肺結核後遺症1例、肺アスペルギルス症1例、肋骨腫瘍1例、不明1例

治療 気管支動脈造影11例うち10例に塞栓術、保存的治療7例、手術2例

転帰・治療効果 再出血なし14例、再出血2例、不明3例(うち転院2例)

治療合併症 なし18例、後脊髄動脈塞栓による両下肢一過性不全麻痺1例

まとめ 当院で経験した19例の喀血に対して11例に血管造影を行い10例に対し動脈塞栓術を施行した。塞栓術は有効な治療法であった。